

平成25年度 外部評価委員会議事概要

1：日時 平成26年3月5日(水) 13時30分～15時45分

2：場所 松江工業高等専門学校 会議室

3：出席者

外部評価委員

高等教育機関関係

竹内 潤 氏 島根大学 理事 副学長

大庭 卓也 氏 島根大学産学連携センター長

地方自治体関係

広野 正充 氏 財団法人しまね産業振興財団 副理事長

地域教育関係

塩川 寛 氏 島根県中学校長会長 松江市立第三中学校長

産 業 界

今岡 克己 氏 松江テクノフォーラム理事
株式会社ワコムアイティ 代表取締役

本校関係者

陶澤 真一 氏 松江高専同窓会 副会長

本校出席者

- 1) 井上 明 校長
- 2) 高橋 信雄 副校長 (教務主事)
- 3) 黒田 祐一 副校長 (管理運営担当)
- 4) 森田 正利 校長補佐 (学生主事)
- 5) 山根 繁樹 校長補佐 (寮務主事)
- 6) 高田 龍一 校長補佐 (社会貢献担当)
- 7) 浅田 純作 教授
- 8) 原 元司 教授
- 9) 伊藤 義雄 事務部長
- 10) 嘉本 龍二 総務課長
- 11) 吉田 隆司 学生課長

4：日 程

開 会

1. 校長あいさつ 13:30
2. 委員長及び委員紹介 13:35
3. 本校出席者紹介 13:40
4. 第二期中期計画の実施状況報告
- 4-1. 教育 13:45-14:50
- 教務関係 発表者 高橋教務主事
- 学生関係 発表者 森田学生主事
山根寮務主事
- 4-2. 研究及び国際交流 発表者 黒田副校長
- 4-3. 社会との連携 発表者 高田校長補佐

5. 質疑応答	14:50-15:20
6. 委員のみによる意見交換	15:20-15:35
7. 委員による講評	15:35-15:40
8. 校長謝辞	15:40

閉 会

5: 議 事

松江工業高等専門学校外部評価委員会規則第5条第1項により、委員長に竹内島根大学理事を選出した。竹内委員長の開会挨拶後、井上校長の挨拶があった。

校長の井上でございます。今日は皆様方、それぞれ本当に大変お忙しい中お越しいただき、どうもありがとうございます。今日お越しの皆様方、改めて名簿を見ていますと、全て松江高専にいずれかの形で関係のある方たちばかりであると思えました。学生との関係、社会との連携の関係、卒業生との関係、それぞれ大変お世話になっております。中には、直接松江高専の教壇に立っていただき、学生を指導していただいている方もいらっしゃいます。改めて御礼を申し上げます。

本日、私どもの方でお願いしたいと考えていますのは、第二期の中期計画実施状況についてであります。ご承知のとおりこの学校は独立行政法人が設置者となっております、この形態になりましたのは平成16年からになります。その際、5年ごとの中期目標・中期計画が策定され、それを実施し、評価するというようなシステムになっておりまして、ちょうど第二期の計画として5年前に始まったものが終わる時期になります。松江高専におきましても、その中期計画に従い計画を立ててそれを実施し、業務としてこなしてきております。今回は、これがどこまでどのように進んできたか、ということをチェックしていただくという形になるかと思えます。どうぞよろしく申し上げます。

また評価に関連いたしますと、本年度、私ども認証評価というものを受けました。大学と高等専門学校につきましては、その教育の実施状況につきまして、外部機関からの評価を7年間ごとに受けるということが法令上規定されており、それによる評価ということになります。この評価を実施しますのは大学評価・学位授与機構という独立行政法人になります。この評価を受けるに当たっては、主として教育関係に関連しますかなり大部の資料を作りまして、それを基にして中身をチェックされました。また、昨年秋の訪問調査では、一般教員、それから学生、卒業生も含めてヒアリングを受けました。高専に対する評価基準に照らしてどうかということですが、まだ結果は最終的には出ておりません。ただ、審議の状況、案を見ますと、各評価基準をクリアしているようです。本校としては、きちんと見ていただいたと思っています。

この学校は昭和39年に創立しております。東京オリンピックがあった1964年でありますけれども、その時の第1回目の入学生が50年前の4月、初めて入学しております。つまり、本年この学校は50周年を迎えることとなります。いろいろな事業を計画しておりまして、その関係でご支援もいただいております。同窓会のほうにも大変お世話になっております。式典関係はこの秋11月に執り行うことを計画しております。また、記念誌を作成するほか、学生にはロゴマークを募集しているような状況でございます。50年に向けて学校一丸となって取り組んでいきたいと思っております。

今日はどうぞよろしく申し上げます。

引き続き、委員の紹介、出席者の紹介があり、竹内委員長から、日程について説明があった。

第二期中期計画の実施状況報告について、資料に基づき下記のとおり本校から説明があった。

- 「教育 教務関係」 → 高橋副校長（教務主事）から説明
- 「教育 学生関係」 → 森田学生主事及び山根寮務主事から説明
- 「研究及び国際交流」 → 黒田副校長（管理運営担当）から説明
- 「社会との連携」 → 高田校長補佐（社会貢献担当）から説明

松江高専の説明後、以下の意見交換・質疑応答があった。

○：委員の質疑・意見等 △：本校側の説明・意見等

○中学生人口が減っていく中で志願者数をずっと維持しておられることは素晴らしいことですが、どのような取組みをなさっておられるのでしょうか。

△1番目が高専の存在を知らしめすこと、2番目が高専を出たらどんな人間になれるかを示すこと、3番目は、実は一番重要なのですが信頼される学校を作ることです。信頼される学校を作ることが、いわゆるステークホルダーに満足してもらえる高専を作っていくことだと思います。一義的には、入ってきた学生をしっかり育て、地域に喜ばれる人材を輩出していくというところがあります。そうした努力が、ここ10年いろいろな形になって成果が上がってきたという気がしております。10年前、私は当時の教務主事の下で入学WGのメンバーでしたが、高専の入試状況についてできるだけ中学校の先生に情報を開示しました。入試の点が悪くてもきちんと巣立っていくということ、問題のある学生に対して学校全体として対応できる体制に少しずつなっていること、若い先生たちもやる気になって取り組んできたこと、これらが形として出てきた。結果的に志願者や中学校の先生たちから評価をしていただくようになってきたということが大きいと思っています。

○先程との関連ですが志願者数が維持されているということですが、中学生と話しをする中で、出てくる言葉としては最近の状況を見てだと思いますが、就職率が高専に行くとき高いということと、いろいろな状況の中で進路変更ができるということが生徒の声としては、よく聞くことです。あわせて生徒の希望もそうだと思いますが、それ以上に保護者の意識、就職を含めて保護者の願いと言いますか、思いがかなり強いのかなという気がしています。本校の場合は志願者数も多くて高校と高専といったときに、おそらく従来は高校を志望する学生が多かったと思うのですが、高校よりも、高専に行きたいという傾向があります。それだけ先程のご説明を聞いたようにきめ細やかな受入体制・中身・進路を、先を見据えているとやっていたというところが、おそらく浸透しているのではないかなと思います。

○先程、先生方からご説明を聞きまして、大変先生方が教育・研究に頑張っている、その上に生徒さんの生活指導ということまでやっただけで感激しています。私がお聞きしたいことはご説明の中で2/3の卒業生の方が就職される、1/3が大学等に行かれるというご説明で、その6割の就職される生徒さんのどれぐらいが県内に就職をいただいている状況なののでしょうか。

△就職者の1/3が地元就職です。年によってあるいは学科によってずいぶん差がありますが、卒業生の6割が就職で、その1/3ですから全体の2割ぐらいです。ただ、卒業生の住所で見ると島根県35%で、15%は中国地区ですので、中国地区に卒業生の半分が帰っているというような状況です。結局Uターンする学生が非常に多い状況です。

○先程も学生さんの生活面の指導から研究教育までかなり大変なことをやっておられて大変だと思いました。いくつか教えていただきたいのですが、コミュニケーションが苦手な学生さんは結構多いと思いますが、特徴的な取組みがありましたら教えていただきたいのと、寮での欠食の割合、学生の数を示していただきましたけれども、高学年になればなるほど欠食の数が多くなっていますが、それは何か理由がありますでしょうか。一般の方への人材育成、一般企業の方のために先生方がいろいろ教えられておられますけれども、学生との関わりみたいなのがあるのかなのか、その三つを教えてください。

△コミュニケーションスキルセミナーという形で一部の学生対象に実施しています。ただ3年生以下はかなりの多くの学生を対象にしていて自発的に自分が苦手だということに来る子もいますが、多くは担任に薦められて参加しております。他の高専では、授業の一環として学年全体でコミュニケーションスキルを上げるような取組を実施しているところもありますが、本校としては学年全体としては行っていません。元々が比較的コミュニケーションが苦手な子が高専には多いです。どちらかというと内向的といいますか、

自分の好きなことをやる、話ができないところがあります。その辺のケアについて本校は担任指導が細やかで、朝の連絡会という会があり、教員が集まっているいろいろな連絡事項を持ち寄ってそれから担任はショートホームルームに行きます。その時には寮からの情報とか学生委員会からの情報とかいろいろ持って、朝から必ず担任が学生の顔を見て、いろいろ話をしながら何か問題があれば、例えば朝来るのが遅いとか問題があるときには、週1回行います学年会で取り上げます。学年会には寮務委員会、学生委員会からも参加していますので、そこでいろいろな取組みをなるべく事の起きる前に対応するような形で行っています。コミュニケーションスキルのみならず、いろいろと苦手意識がある子に対して早め早めにいろいろ対応していくということを学校として行っているつもりです。

△欠食問題について本校では全ての科目が選択科目ですが、1～3年生までは選択の余地がなく、この時間この授業しかありません、ぜひこれを取りなさいという形の授業で埋まっていて、3年生まではほぼ全員が同じように全ての科目を履修するようになります。一方、4・5年生になりますと、本当に授業の選択肢が多くなってきて、そこで授業を取るか取らないかの選択が学生それぞれに任されます。そのため、4・5年生になると朝授業がないとか、夕方授業があるのでバイトに行っているとか、それぞれの生活のスタイルが若干変わってきます。したがって、3年生までは一斉に行きなさいと言いますが、4・5年生に対しては寮の中では点呼はもちろんきっちり行いますが、それ以上の所はあまり拘束しないような形ですので、それがこういう結果に表れていると思います。

△人材育成事業と学生との関わり合いですが、基本的には人材育成事業の場合は、財団あるいは島根県からの受託事業として行っていて、社会人の方がお見えになって直接学生をそこへというのはありませんが、外で例えば専門的な講演会などの時には受付の手伝いとか、時々専攻科生が関わったりはしています。人材育成事業で教員が行う訳ですが、そういった所で得たノウハウというのは当然、教育にも活かしていくような形で、むしろそちらの方の効果が大きいと思います。

○本当にお聞かせいただき感動しました。毎回感動しているのですがけれども、去年海の日に開催されたからでしょうけど、保護者280人の方が参加する、そんな参観日はないのではないかと思います。それは素晴らしいと思いましたし、それほど保護者の方が期待して下さっているという事はありがたいと思いました。留年率が年6%ぐらいになっているという話がありましたけども、以前はずいぶん高かったことを話されていましたが、高専とは随分留年になって、大変だなと思いましたけども、考えてみたら高校だって出るときに大学受験に失敗する人が山ほどいるわけで、それを思えばいいのではないかと思います。我が社に、過去十数名の皆さんが応募していただき、採用して中核となって働いておられます。ただその中の半数が会社を離れられました。大学から来られている社員は定着率が非常に良いです。その中で高専の人は、割と独立される方が多いです。そのように数字的には感じます。それは、私は良いことだと思います。要するに独立してやるだけの自信を持ってらっしゃる方がたくさん育っているということと、会社を起すぐらいの迫力のある人がいるということの良さを非常に感じていて、今後もそういう気概のある学生を育ててもらいたいと思いますし、我々としては反省としてもっと待遇を良くしようとか、もうちょっと本人のやりたい仕事をどんどん開発していけるような会社にしていきたいです。

○私も外部評価委員会を長らく来させていただいて、毎年聞いていて、毎年すごいなと感じております。その中でも非常によく仕組みが作られていて、実際に実践されて成果を出しているそういうところが一番と感じております。ご説明の中にあつた件で私も質問させていただきたいと思います。一つは教育のところで、自分のポートフォリオ、それが学生自ら見られるという、同級生と比べてどうかという点をよく分かるという仕組みをされている。特に良いと思ったのは、学校の先生方のコメントがある。見た本人に学校側にコメントを返しているという意味では、自分のポートフォリオという意味でコミュニケーション、学校とのコミュニケーションという面では役立っているのではないかと、先生方も個人のそれぞれの学生が書いていることも掴んでいることだと思います。学生の意識というやり方をしていく中で何か変化が、良い点や悪い点の変化があれば教えていただきたいです。もし学生が良い評価をしていけばもっと仕組みレベルを上げて活用していったらいいと思います。

二点目は先程の委員の質問の中にもありましたが、今回の評価の地域社会と連携がSという評価で特に優れていて、確かにそうだと思います。ただ、学校の先生方に負担が大きいということで、これも分かるというところではあります。しかし、負担が大きい分得たものが大きくて、それが学生にフィードバックされているという回答をいただいてそれも良いことであると思います。また、この地域社会の関係で、今後、学生が地域社会の関わりの中に入っていきけるような取組みが出来ないものか、あるいは、何か関われないかと思っています。我々も学生の時には知識とそれを使いこなすトレーニングのようなものをたくさん身に付けてきましたが、やはり社会に出ていくといろいろな価値観の変化、そういったいろいろな人とのコミュニケーションとか関わりを広く持って、フィールドがたくさん持っている人が強く生きて行けるかなと思いました。学生の時からこういった連携、産学連携などのところで少しでもフィーリング感を味わえば良いという気がして質問させていただきました。以上二点です。

△最初の電子ポートフォリオですが、コミュニケーションツールとしての使い方を工夫しなければ上手くいかないのではと思っています。例えば学生が見られるポートフォリオと教員が見られるポートフォリオは全く違います。学生はほんのわずかしか見られません。我々は教員だけが見られるポートフォリオを使って、担任が代わる時に学生には見せられない記事も書いて引き継ぐことができます。また、教員は誰でも見られるということは、あの先生は、こういうことを通信簿に書くのかといった、若い先生達の手本というか参考にもなります。ポートフォリオには学生が書き込む欄がありますが、なかなか上手くいっていません。「今年の目標」とか「今年何やったか」を書いていって、5年先に自分の履歴をたどるのに使いなさいよと言いますが、なかなか学生の意識が高まっていなくて、意識の変化を期待しているのですが、残念ながら現実には追いついていないです。ポートフォリオを使って自己管理をしましょうというので、あと何単位以上取らないと進級できないというのを少しガイダンスの形で示していますが、学生は最低のところを狙ってくるようなことで、全体的に言えば意識が上がってきていると言い切れないことに辛いところがあります。

△学生にとってみては、先程話がありましたが、自分の成績などをなかなか意識するきっかけがないという事が多くて、以前は一覧表になった紙を学生に持たせていて自分の取った単位に○をして、自分で何単位とったかを確認する様なことを行いましたが、それよりも簡便になりましたし、そういう意味では以前よりはあと何単位とかということが、分かり易くなったと思います。ただ、先程いったように意識が変わったというのはちょっと難しいかなと思います。

△質問のありました、地域との連携の中での学生の教育ということが、これは非常に私も大事な事だと思っていて、インターシップの受け入れ先の充実、地域との連携活動の中で地域の会社の方々からインターシップあるいは校外実習の受け皿、直接的にはそういうこともありますし、さらに私どもは出来るだけ学生に地域を知ってもらうために、10年以上になります地域産業論という講座を開いておいて、地域の講師の方にできるだけ来ていただいて、今は「地域の社会と産業」という形で講座を開いています。これはオムニバス形式で本校の教員も講義をしますが、半数以上は外部講師の先生をお招きして講座を行っています。また「技術者倫理」という科目も、外部講師をお招きし見直ししてきています。そういった中で単に我々の感覚だけではなく、実際に現場を経験されている技術者の皆さまに講師として来ていただいて、地域の実際の現場の声を学生に届けるという工夫もしております。これは私の所管ではないですが、学生主事の所管ですが、アルバイトは、3年生までは厳しく指導しており、簡単にアルバイトはさせない、長期休暇に許可しています。4年生以上には比較的ゆるくしております、やはりそういったところで地域との結びつきとか、委員がおっしゃった社会の中で育ててもらうひとつの重要な要素になるのではないかと考えております。

○さっきの電子ポートフォリオ、いわゆる会社の中でも人事効果制度というのが、ものすごく課題で、「どうしたことしたら出世できるか」、「どうしたらボーナスがアップできるのか」みんな必死で考えているんですね。なかなか分かりにくかったり、認めてもらえてないと不満があったり非常に難しいですけども、それが非常に良くできているなと思って、しかも学内で作ってらっしゃるというのは、素晴らしいと思

ました。ちなみにこれは Ruby かなんかで作られているのですか？

△これはうちの技術職員が作っています。

○すごいですね。企業の中の商品でいけると思いました。パッケージにしてですね。いろいろなものがあると思いますが、我が社としても使いたいと思いました。今は紙でしていますから。それがこういった形で実現できたら、とてもすばらしいと思いました。

△ある程度大学でも行っているのではないかと思います。おそらく難しいのは、大学もそうですが、学校で行う教育内容をシステムに反映させた時に、汎用というのに限界があると思います。学校によって認定の仕方とか評価とか、かなり差があってカスタマイズの山のような感じになってしまう、そういう所は考えどころかと思えます。

○私が以前勤めていた会社では、これに近いようなものが片面の表面にあるとすると、裏面にはそれぞれの本人がどのようなチャレンジをするか、チャレンジプランを抱きあわせて、評価に対して自分はどうするかというものがありました。学生から返事が返ってくる時にチャレンジ項目みたいなのをピックアップして学生から上がってくるような仕組みでも、学生から自主的に書き込むような仕組みでも、もう少し付け加えられたら良いと思いました。

【委員による講評】

○今、委員で集まって話をしておりましたが、今回どの委員の方も皆さんの活動内容、教育面、教育面、社会貢献が本当に多岐にわたって、いろいろな素晴らしい取組みをされていて着実な成果を挙げておられるということで、皆さん感心されております。年々レベルが上がってきているのではないかと、いろいろな形で計画立てて、目標を達成するというサイクルでずっと進んでおりますので、着実にレベルを上げながらそれをクリアされているという印象を皆さん持っておられます。

それで今後に向けてですが、最後のあたりで少し議論になっておりましたが、やはり社会に向けてといえますか、もちろん高専の中での教育・研究それぞれ素晴らしくレベルアップしていますけれども、大学でも同じように言われていますが、教育・研究・社会貢献それらを全部一体として取り組んでいく。社会の中での貢献の仕方も教育面・研究面含めて学生が社会の中でいろいろな体験をするとか、インターシップだけではなくて、いろいろな社会を体験しながら学んでいく、それによってやはり社会貢献できるような人材を育てて、地域の一人としての社会に向けた取組みをさらに強めていただければいいのではないかと思います。やはり今、18歳以下の人口がどんどん減少していく中で、着実に志願者を確保していますが、長期的に見るとやはりなかなか厳しい状況というのが出てくるであろうと、そういう中でそれを長期的な目標に向けてさらに今まで以上に地元の産業界との連携、今作っておられるテクノフォーラムを中心とした産業界との連携あるいは卒業生・同窓会まで含めた形で何か仕組みを作って、将来構想の中に産業界・卒業生の方にもいろいろお手伝いしていただきながら、将来構想を立てていく、それも必要ではないか。今後に向けていろいろな取組みを進めておられますけれども、さらに将来に向けて組織化とか、さらにPR面、新たな高専が必ず必要で社会的な役割を十分果たしていけるような方向へもって行かれるような取組みを次期に向けて計画していただければ良いのではないかと皆さんのご意見でした。